

青年期における両親への相談行動について

—利益とコストの予期, 親子関係に焦点を当てて—

武田裕子・石田 弓

The consulting to parents in the youth:
Focus on anticipation of the profit and the cost, and parenthood

Yuko Takeda and Yumi Ishida

大学生にとって、親は身近な相談相手となり得るが、親への相談行動やその利益とコストに関する研究は少なく、利益とコストを測定する尺度も作成されていない。本研究では、親への相談行動の利益・コスト尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することで、親への相談行動に特有の利益・コスト尺度を作成した。次に、親への相談行動意図や利益・コストの性差と父母差、相談行動に影響を及ぼす変数を検討した。そして、女性の方が母親に相談しやすいことが示された。また、親との信頼関係が相談実行の利益である「ポジティブな結果」を予期させ、親への相談を促進させることや、親からの心理的分離が相談回避の利益である「自助努力による充実感」を予期させ、父親への相談を抑制させることが示された。

キーワード：親への相談行動, 利益とコストの予期, 親子関係

問題と目的

1. 大学生の問題や悩み

近年、心理・社会的不適応状態を呈する学生の割合が増加し、長期留年や休退学の問題(内田, 2009)が深刻化している。また、大学生の不登校やひきこもりの問題も多い(水口・石谷・安住, 2011)。

大学は、中学校や高校とは環境が大きく異なるため、大学生が抱える悩みは多種多様である。例えば、進級や就職などの学業・進路の悩み、アルバイトや生活費などの金銭的な悩みなど、大学生特有の悩みもある。様々な問題がある中で、高井(2008)は、小学校から大学に至るまでの学校生活を通じて、人間関係は児童・生徒・学生が直面する重要な問題の一つであるとしている。そして、大学生は人間関係の悩みの中でも、特に友人関係で悩むことが多いことを明らかにしている。また、現代青年の友人関係に見られる様相として、小塩(1998)や岡田(1995)は「広く浅い友人関係」、「自己防衛的な友人関係」を挙げ、現代青年の友人関係の希薄さは、「ふれあい恐怖(山田, 2002)」という概念でも表されている。大学生はクラスやゼミの他に、サークルや部活動、アルバイトやボランティアなど、様々な場面で友人関係の悩みを抱えることが多いと思われる。

2. 相談行動研究の動向

永井（2010）は、個人が問題を抱え、それを自身の力では解決できない場合に、必要に応じて他者に援助を求めることは、その問題の対処方略の一つであるとしている。この援助を受ける行動の一つとして、「他者に悩みを相談する」という相談行動が挙げられる。この相談行動は、これまで、主に社会心理学の領域において援助要請の観点から研究されてきた。援助要請行動の代表的な定義は「個人が問題の解決の必要性があり、もし他者が時間、労力、ある種の資源を費やしてくれるのなら、問題が解決、軽減するようなもので、その必要のある個人がその他者に対して直接的に援助を要請する行動」（DePaulo, 1983）とされるが、これによれば、相談行動は援助要請行動の一形態であるということが出来る（永井・新井, 2007）。

大学生にとって、身近な人物である両親は、大学生にとって適切な援助要請の対象となり得るが、両親に対する援助要請研究は数少ない。早川・佐藤・林（1994）によると、大学生の相談相手としては「友人」が半数以上選ばれているのに対し、「母親」が相談相手として選ばれるのは28.5%と少ない。また、後藤・廣岡（2005）の研究では、友人関係に関わる深刻な悩みを親に相談することに抵抗を感じる中学生が多く、相談抵抗の高い者ほど親に対して話すことで傷つくことを恐れ、話しても仕方がないと感じていることが明らかになっている。この結果について、中学生は親からの精神的自立が始まるとともに、親には心配をかけたくないというような気持ちが働くためであることが推察されている。この研究の対象は中学生であるが、大学生も中学生と同様に、親からの精神的自立や親に心配をかけたくない気持ちのために、親を相談相手に選ぶことが少ないことが示唆される。また、大学生は中学生と異なり、対人関係の広がり、一人暮らしにより両親と離れること、自己解決能力が備わることが考えられ、大学生における環境や能力の変化が、親への相談行動に影響することが推測される。

援助要請との関連が頻繁に検討される変数として、相談する側の性別が挙げられる。海外の研究のほとんどは、男性よりも女性のほうが、心理的問題の援助要請が高いことを報告している（水野・石隈, 1999）。このような性差は、援助要請が伝統的な男性役割に反するためであると解釈されている（Addis & Mahalik, 2003）。永井（2010）は、日本の大学生を対象に援助要請意図の性差について検討しており、家族および友人への援助要請意図は女性のほうが高いことを示した。また、芥川・兒玉（2010）は、大学生の友人に対する援助要請意識尺度を作成しており、その尺度について性差を検討した結果、「肯定的態度」は男性より女性のほうが有意に高く、「相談への不安」と「自己評価の低下」では女性より男性のほうが有意に高いことを明らかにした。また、福岡・橋本（1997）の研究では、家族からのサポートは男性より女性のほうが受けやすいことが明らかになっている。福岡・橋本（1997）は、この結果について、家族とのサポート関係のもつ心理的な意味を反映するものとして解釈しており、例えば、男子学生の場合、家族からの自立が重要な発達課題の一つであり、家族への依存はむしろ否定的な意味をもつ可能性さえあると述べている。さらに、池田（2000）は、日本の女子大学生は青年期後期に達してもなお、親に対して情緒的な援助を求める傾向が強いことを示唆している。これらのことから、親に対する相談行動については、相談する側の性別が関係することが推測される。

このように、大学生にとって、親は重要な援助要請の対象となると考えられるが、親への相談行動に関する研究は数少ない。また、相談相手が父親か母親かによって、その相談行動は異なると考えられるため、父母それぞれについて、相談行動の実態を把握する必要がある。また、両親への相談行動については、相談する側の性別が関係すると考えられるため、男女差を検討する必要もある。

3. 相談行動の利益とコストの予期

相談行動の促進・抑制につながる要因の一つとして、「利益とコスト」という概念が提唱されている（高木, 2007）。相談行動には、実行と回避のそれぞれにポジティブな結果である利益と、ネガティブな結果であるコストが存在し、こうした結果の予期に基づき、相談行動の実行や回避が決定される。この利益とコストの視点は、援助要請における結果予期を多様な側面から扱うことを可能にする（高野・宇留田, 2002）。永井・新井（2007）は、中学生における「友人への相談行動の利益・コスト尺度」を作成し、「ポジティブな結果」、「否定的応答」、「秘密漏洩」、「自己評価の低下」、「自助努力による充実感」、「問題の維持」の6因子が抽出された。さらに、相談行動と相談行動の利益・コストとの関連を検討した結果、相談行動の高さには、相談実行の利益、問題の程度の高さが影響することが明らかになった。さらに、加茂田・秋光（2012）は、「教師への相談行動の利益・コスト尺度」を作成している。この研究では、永井・新井（2007）が作成した「友人への相談行動の利益・コスト尺度」と同様の下位尺度のほかに、教師への相談行動に特有のコストとして、「教師からの評価懸念」と「相談における負担の大きさ」が抽出された。

このように、友人や教師など、相談する相手が異なれば、相談行動の利益・コストも異なるといえる。そのため、親への相談行動の背景にも、親への相談行動に特有の利益・コストが存在すると考えられる。しかし、「親への相談行動の利益・コスト」を測定する尺度は存在しない。そのため、親についても友人や教師と同様に相談行動の利益・コスト尺度を作成する必要がある。

4. 親への相談行動と親との関係性について

親への相談行動には、親との現在までの関係性が影響することが考えられる。池田（2000）の研究では、親からの情緒的援助を強く求める学生は、父母子の3者間の親密さをいずれも非常に高く認知していること、親からの情緒的援助を強く求めない学生は、相対的に親密さが低く、特に父子間および母子間の距離が著しく長くなっていることが明らかになった。このことから、親への相談行動については、親子関係が影響していることが推測される。

水本・山根（2010）は、親子関係を、親からの心理的分離という側面と親との間に築かれる信頼関係という側面から捉えている。そして、親からの精神的自立という側面から捉えた発達のプロセスを適応の視点を加えて論じることのできる尺度を開発し、「母親との信頼関係」と「母親からの心理的分離」の下位尺度から構成される「母子関係における精神的自立尺度」が作成された。「母親との信頼関係」は自尊感情や愛着の安定性といった幼少期から築かれた母親との関係を基盤として自己の価値を認めることができるという精神的適応と関連し、比較的安定して変化しにくい母子関係の個人差を示す指標であるとされる。一方、「母親からの心理的分離」は自律性や自我同一性との関連が見られ、自己を確立していくという発達の指標であることが示唆されている。

以上のことから、親との間に築かれる信頼関係や親からの心理的分離など、親との現在までの関

係は、親への相談行動および相談行動の利益・コストと関連があることが考えられる。そこで、本研究では、「母子関係における精神的自立尺度」を使用し、親との信頼関係や親からの心理的分離と、親への相談行動意図および相談行動の利益・コストとの関連性を検討することとする。

5. 本研究の目的

本研究の目的は、青年期における両親それぞれに対する相談行動の実態や、親への相談に関するイメージを把握することである。そして、大学生が友人関係などの悩みを抱えた際に適切な援助を提供する環境づくりと、大学生に対する親からの援助が有効に機能するための手がかりを示すことを目的とする。そのために、以下の2つの研究を行う。

研究1では、親への相談における利益・コストを測定する尺度が作成されていないことから、「親への相談行動の利益・コスト尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

研究2では、大学生における父母への相談行動の実態を把握するため、「親への相談行動意図」、「親への相談行動の利益・コスト」について、相談する側の性差と父母差を検討することを第1の目的とする。また、「親への相談行動意図」へ影響を与える変数として「親との現在の関係」と「親への相談行動の利益・コスト」を挙げ、それらの影響を父母別に検討することを第2の目的とする。

研究1

目的

これまで、親への相談行動の利益とコストを測定する尺度は作成されていない。そこで、「親への相談行動の利益・コスト尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象者

調査対象者は、大学生と大学院生141名（男性70名、女性69名、不明2名）であり、平均年齢は20.48歳（ $SD=1.48$ ）であった。

2. 調査手続き

2013年10月に、大学の講義時間後に無記名自記式質問紙を集団に配布した。そして、翌週の授業時間後に回答済みの質問紙を回収した。また、同時期にスノーボール法による調査も実施した。

3. 項目の選定

親への相談行動の利益・コストについての項目は、「友人への相談行動の利益・コスト尺度」（永井・新井, 2007）と「教師への相談行動の利益・コスト尺度」（加茂田・秋光, 2010）の下位尺度項目を参考に選定し、大学生における親への相談について適切でないと考えられた項目は除外、もしくは適切な表現に変換して使用した。また、親への相談行動に特有の利益・コストの下位尺度項目を収集するために、親への相談実行および相談回避の理由に関する予備調査を実施した。対象者は大学生と大学院生36名（男性5名、女性31名）であり、平均年齢は23.4歳（ $SD=8.76$ ）であった。友人関係の悩みがある場合を想定させた上で、父親と母親に相談したいかどうかを尋ね、相談したい理由、相談したくない理由を自由記述させた。予備調査で得られた記述の中で既存の尺度には見られないもの（“相談すると、自分の考えを肯定してくれる”、“相談すると、否定される”、“親は事

情を把握していないため、説明が面倒”などを追加することとした。

4. 質問紙の構成

(1) 親への相談行動の利益・コスト尺度

既存の尺度および予備調査を参考に作成した47項目を使用した。まず、友人関係の悩みを想定させるために教示文を提示し、その状況において、親に相談することに関してどのようなことを考えると思うかを尋ねた。『そう思わない』から『そう思う』までの5件法。

(2) 親への相談行動意図尺度

(1)と同様、友人関係の悩みがあることを想定させるために教示文を提示し、その状況において、父母にどのくらい相談したいと思うかをそれぞれ尋ねた。『相談したくない』から『相談したい』までの5件法。

(3) サポート希求尺度

親への相談行動の利益・コスト尺度の構成概念妥当性を確認するため、相談行動に関連する変数である三浦・坂野（1996）のサポート希求因子6項目を使用した。『全くしない』から『よくする』までの4件法。

(4) 被援助志向性尺度

親への相談行動の利益・コスト尺度の構成概念妥当性を確認するため、相談行動に関連する変数である田村・石隈（2001）の被援助志向性尺度11項目を使用した。『そう思わない』から『そう思う』までの5件法。

(5) フェイス項目

性別、年齢、学年、現在の居住形態（一人暮らし、実家暮らし）。

結果

1. 分析対象者

分析対象者は、調査対象者141名のうち、欠損値の多かった5名を除いた136名（男性68名、女性68名）であり、平均年齢は20.36歳（ $SD=1.12$ ）であった。

2. 探索的因子分析

まず、「親への相談行動の利益・コスト尺度」で得られた結果に関して項目分析を実施し、フロア効果がみられた項目を9項目除外した。そして、除外した項目以外で探索的因子分析（主因子法、Promax回転）を実施した。そこで、因子負荷量が.35以下であった2項目と、修正済み項目合計相関で十分な値が得られなかった3項目を除外した。

最終的に、第1因子は、相談実行の利益である『相談すると、親は考えを整理してくれる』など15項目からなり、「ポジティブな結果」と命名した。第2因子は、相談実行のコストである『相談しても、親とは意見が合わない』など11項目からなり、「ネガティブな結果」と命名した。第3因子は、相談回避の利益である『一人で悩みに立ち向かうことで、強くなれる』など4項目からなり、「自助努力による充実感」と命名した。第4因子は、相談回避のコストである『相談しないで一人で悩んでいても、よけいに悪くなると思う』など3項目からなり、「問題の未解決」と命名した。

Table 1
各下位尺度の記述統計および信頼性・妥当性

下位尺度	記述統計		信頼性	妥当性			
	M	(SD)	α 係数	相談行動 意図	サポート 希求	被援助志向性	
						欲求	抵抗感
ポジティブな結果	3.44	(.68)	.909	.598**	.228**	.315**	-.365**
ネガティブな結果	2.64	(.80)	.896	-.390**	.026	.025	.246**
自助努力による充実感	3.04	(.83)	.720	-.374**	-.287**	-.291**	.442**
問題の未解決	3.21	(.97)	.765	.298**	.397**	.574**	-.404**

* $p < .05$, ** $p < .01$

3. 信頼性と構成概念妥当性の検討

信頼性の検討のために、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、各下位尺度において $\alpha = .720 \sim .909$ となったため、内的整合性の観点における信頼性はある程度高いと考えられる。

次に、構成概念妥当性の検討のために、相談行動の利益・コスト尺度の各下位尺度得点と、相談行動意図尺度、サポート希求、被援助志向性尺度における各得点との相関係数を算出した(Table1)。

その結果、概ね有意な値が示され、有意であった相関係数の正負は、永井・新井(2007)の先行研究と一致するものであった。しかし、「ネガティブな結果」において、「サポート希求と被援助志向性の欲求との相関はみられなかった。「ネガティブな結果」に関しては、相談行動意図と負の相関、被援助志向性の抵抗感と正の相関がみられたこと、信頼性についても α 係数も.896と高い値が得られたことから、下位尺度として使用することとした。最終的に、信頼性と妥当性がある程度確認できた33項目を「親に対する相談行動の利益・コスト尺度」とした。最終的な因子分析によるパターン行列をTable2に示した。

考察

1. 除外された下位尺度項目に関して

研究1では、既存の尺度に見られた「秘密漏洩」の下位尺度項目の全てが、フロア効果のために除外された。この「秘密漏洩」という相談実行のコストは、相談相手との関係性の違いや学校と家庭といった環境の違いが影響していることが示唆される。学校という広い環境の中では、相談相手以外の友人や教師に相談した内容が漏れる可能性は高くなると考えられる。一方、親については、ある程度の信頼関係が築かれており、家庭の中では、相談したことが他者に漏れる心配性が少ないことが推察される。このような理由から、友人や教師に対する相談行動については、「秘密漏洩」という相談実行のコストが生じやすいと思われる。そのため、友人や教師への相談行動の利益・コスト尺度で見られた下位尺度項目が、親に対する相談行動で除外されたと考えられる。

2. 構成概念妥当性に関して

構成概念妥当性については、「ネガティブな結果」においてのみ、「サポート希求」と「被援助志向性の欲求」との相関は見られなかった。基尺度と対象者と相談相手が異なる本研究では、適切に構成概念妥当性を測定できなかったと考えられる。また、基尺度である「教師に対する相談行動の利益・コスト尺度」(加茂田・秋光, 2010)は、構成概念妥当性の検討がされていなかった。このことも、研究1において十分な値が示されなかったことと関連していると考えられる。

Table 2

親への相談行動の利益・コスト尺度における探索的因子分析結果

	1	2	3	4
相談すると、真剣に相談に乗ってくれる。	.787	.028	-.111	.018
相談すると、親が問題解決のために協力してくれる。	.768	.036	-.230	.231
相談すると、ほっとする。	.712	.019	.124	-.044
相談すると、気持ちがすっきりする。	.703	.148	.069	-.234
相談すると、親はちょっとした気遣いをしてくれる。	.678	.063	-.041	.225
相談すると、気持ちをわかってもらえる。	.673	-.183	-.137	.149
相談すると、よい意見やアドバイスをもらえる。	.664	-.236	-.027	.119
相談すると、悩みの解決法がわかる。	.629	.196	.120	-.055
相談すると、考えを整理してくれる。	.624	.061	.206	.110
相談すると、気持ちが楽になる。	.586	.065	.159	-.299
相談すると、自分の考えや気持ちをはっきりする。	.545	.069	.286	.059
相談すると、公平な立場からアドバイスをしてくれる。	.506	-.104	.076	.018
相談すると、励ましてくれる。	.486	-.100	-.036	.020
相談すると、前向きな気持ちになれる。	.382	-.030	.278	-.193
相談すると、悩みが解決する。	.378	-.060	.126	-.112
相談すると、親は私が望んでないことをする。	.170	.847	-.271	-.032
相談すると、言いたくないことまで言われる。	.117	.818	-.202	.018
相談しても、親とは意見が合わない。	-.078	.786	-.033	.025
相談すると、説教されたり怒られたりする。	.092	.700	-.131	-.134
相談すると、めんどうなことになる。	-.155	.667	-.001	.014
相談すると、話が大きくなる。	.084	.624	.068	.065
親は事情を把握していないので、説明が面倒。	-.163	.577	.151	.222
相談すると、批判される。	-.013	.569	-.053	-.197
相談しても、別の意見を言うてくる。	.136	.566	.136	.001
相談しても、わかってもらえない。	-.318	.502	.111	.009
相談すると、あれこれ聞かれる。	-.175	.463	.219	.219
人に相談するよりも、自分で何とかすることで、成長できる。	.142	-.129	.730	-.041
一人で悩みに立ち向かうことで、強くなれる。	.213	-.045	.669	-.067
悩みや困ったことがあっても、親に頼らず何とかするべきだ。	-.175	.077	.498	-.045
悩んでも、人に相談するより自分で解決したい。	-.022	.004	.382	-.360
相談しないで一人で悩んでいても、よけい悪くなると思う。	.033	-.047	-.005	.733
誰にも相談しないと、ずっと悩みから抜け出せないと思う。	.008	.025	.020	.724
一人で悩んでいても、いつまでも悩みをひきずることになる。	-.007	-.114	.182	.694

研究 2

目的

大学生の「親への相談行動意図」および「親への相談行動の利益・コスト」について、相談する側の性差、父母における差を検討することを第1の目的とした。また、「親への相談行動意図」へ影響を与える変数として「親との現在の関係」と「親への相談行動の利益・コスト」を挙げ、それらの影響を検討することを第2の目的とした。

方法

1. 調査対象者

調査対象者は、大学生と大学院生 313 名（男性 142 名，女性 159 名，不明 12 名）であり，平均年齢は 20.60 歳（ $SD=1.47$ ）であった。

2. 調査手続き

2013 年 11 月および 12 月に，大学の講義時間を利用して，無記名自記式質問紙調査を集団で実施し，その場で回収した。また，同時期にスノーボール法による調査も実施した。

3. 質問紙の構成

(1) 親への相談行動の利益・コスト尺度

研究 1 で検討した 33 項目を使用した。まず，友人関係の悩みを想定させる教示文を提示し，その状況において，親に相談することに関してどのようなことを考えると思うかを，父親と母親それぞれについて尋ねた。『そう思わない』から『そう思う』までの 5 件法。

(2) 親への相談行動意図尺度

(1)と同様，友人関係の悩みがあることを想定させるために教示文を提示し，その状況において父親と母親にどのくらい相談したいと思うかをそれぞれ尋ねた。『相談したくない』から『相談したい』までの 5 件法。

(3) 親子関係における精神的自立尺度

水本・山根（2011）の「母子関係における精神的自立尺度」を使用した。「親との信頼関係」因子（6 項目），「親からの心理的分離」因子（5 項目）の 11 項目から構成された。父親については，質問文の“母親”の部分“父親”に置き換えて使用した。親との現在の関係についてどのくらいあてはまると思うかを，父母それぞれについて尋ねた。『全くあてはまらない』から『よくあてはまる』までの 5 件法。

(4) フェイス項目

性別，年齢，学年，現在の居住形態（一人暮らし・実家暮らし）。

結果

1. 分析対象者

分析対象者は，調査対象者 313 名のうち，欠損値の多かった 16 名を除いた 297 名（男性 137 名，女性 157 名，不明 3 名）であり，平均年齢は 20.62 歳（ $SD=1.48$ ）であった。このうち，両親とも健在である者は 273 名（男性 128 名，女性 142 名，不明 3 名）であった。

2. 各尺度における因子構造の確認

(1) 親への相談行動の利益・コスト尺度

まず，各尺度で得られた項目に対して項目分析を実施した。天井効果，フロア効果ともに見られなかったため，各尺度の全ての項目を分析の対象とした。そして，父母それぞれについて，研究 1 と同様の因子構造になるかを確認するため，父母別に探索的因子分析（主因子法，Promax 回転）を行った。その結果，父親において，1 項目（『父親は事情を把握していないので，説明が面倒』）が十分な因子負荷量を示さなかったため，父親，母親ともに除外することとした。除外した 1 項目以

外は、父母ともに研究1と同様の因子構造を示す結果となった。最終的に、第1因子は15項目からなる「ポジティブな結果」、第2因子は10項目からなる「ネガティブな結果」、第3因子は4項目からなる「自助努力による充実感」、第4因子は3項目からなる「問題の未解決」となった

次に、信頼性の検討のためにCronbachの α 係数を算出した。その結果、父親において $\alpha=.681\sim.909$ 、母親において $\alpha=.799\sim.942$ を得ることができたため、ある程度の内的一貫性が示された。父親と母親それぞれの最終的な因子分析結果をTable3とTable4に示した。

Table 3
父親への相談行動の利益・コスト尺度における探索的因子分析結果

	1	2	3	4
父親に相談すると、前向きな気持ちになれる。	.802	.000	-.078	-.052
父親に相談すると、悩みが解決する。	.775	.171	-.079	-.116
相談すると、父親からよい意見やアドバイスをもらえる。	.753	-.027	.036	-.002
相談すると、父親は考えを整理してくれる。	.753	.171	-.020	.061
父親に相談すると、ほっとする。	.751	-.001	-.091	-.115
父親に相談すると、気持ちがすっきりする。	.726	-.032	.014	-.137
父親に相談すると、悩みの解決法がわかる。	.721	.181	-.153	-.155
父親に相談すると、気持ちが楽になる。	.695	-.153	-.021	-.039
相談すると、父親は真剣に相談に乗ってくれる。	.688	-.088	.085	.261
父親に相談すると、自分の考えや気持ちをはっきりする。	.681	.129	-.054	-.071
相談すると、父親が問題解決のために協力してくれる。	.651	.138	.128	.105
相談すると、父親は公平な立場からアドバイスをしてくれる。	.641	.031	-.043	.010
相談すると、父親はちょっとした気遣いをしてくれる。	.605	-.074	.134	.208
相談すると、父親に気持ちをわかってもらえる。	.574	-.218	.054	.018
相談すると、父親が励ましてくれる。	.555	-.164	.226	.146
相談すると、父親に批判される。	-.027	.777	.003	-.117
相談すると、父親に言いたくないことまで言われる。	.042	.772	.029	.026
相談すると、父親に説教されたり怒られたりする。	.142	.759	-.071	-.166
父親に相談すると、話が大きくなる。	.079	.753	-.012	.076
相談すると、父親は私が望んでないことをする。	-.046	.744	-.029	.034
父親に相談すると、めんどうなことになる。	-.137	.731	-.003	.064
相談をしても、父親が別の意見を言ってくる。	.300	.669	.044	.106
相談をしても、父親とは意見が合わない。	-.291	.595	.011	.060
相談すると、父親にあれこれ聞かれる。	.134	.572	.236	.109
相談しても、父親にはわかってもらえない。	-.372	.512	.070	.066
父親に相談するよりも、自分で何とかすることで、成長できる。	.015	.025	.640	-.084
一人で悩みに立ち向かうことで、強くなれる。	.161	.126	.579	-.138
悩んでも、父親に相談するより自分で解決したい。	-.213	-.084	.480	-.097
悩みや困ったことがあっても、父親に頼らず何とかするべきだ。	-.155	.092	.376	-.094
一人で悩んでいても、いつまでも悩みをひきずることになる。	-.083	.009	-.164	.822
誰にも相談しないと、ずっと悩みから抜け出せないと思う。	-.017	.115	-.098	.777
相談しないで一人で悩んでいても、よけい悪くなると思う。	.044	.021	-.070	.666
因子間相関	1	2	3	4
1	-	-.396	.351	-.274
2		-	-.075	.146
3			-	-.114
4				-

Table 4

母親への相談行動の利益・コスト尺度における探索的因子分析結果

	1	2	3	4
相談すると、母親からよい意見やアドバイスをもらえる。	.885	.032	-.070	-.110
母親に相談すると、悩みが解決する。	.807	.158	-.132	-.144
母親に相談すると、悩みの解決法がわかる。	.776	.215	-.156	-.079
相談すると、母親が問題解決のために協力してくれる。	.760	.199	-.106	-.140
相談すると、母親は真剣に相談に乗ってくれる。	.755	-.007	.168	-.009
母親に相談すると、気持ちがすっきりする。	.751	-.108	.109	.148
相談すると、母親は考えを整理してくれる。	.746	.112	-.160	-.122
母親に相談すると、自分の考えや気持ちがはっきりする。	.737	.082	-.028	.015
母親に相談すると、前向きな気持ちになれる。	.729	-.076	.020	.093
母親に相談すると、ほっとする。	.721	-.050	.101	.171
母親に相談すると、気持ちが楽になる。	.679	-.070	.013	.145
相談すると、母親が励ましてくれる。	.655	-.090	.250	.106
相談すると、母親に気持ちをわかってもらえる。	.651	-.225	.111	.047
相談すると、母親はちょっとした気遣いをしてくれる。	.640	-.069	.182	.085
相談すると、母親は公平な立場からアドバイスをしてくれる。	.608	.007	-.026	-.064
相談すると、母親に言いたくないことまで言われる。	.056	.768	-.024	-.060
相談すると、母親は私が望んでないことをする。	-.118	.700	.045	-.017
相談すると、母親に批判される。	.083	.700	-.067	.021
相談すると、母親に説教されたり怒られたりする。	.027	.696	-.071	.029
母親に相談すると、めんどろなことになる。	-.101	.681	.119	.017
相談をしても、母親が別の意見を言うてくる。	.287	.674	.080	.008
相談をしても、母親とは意見が合わない。	-.227	.613	.068	.160
母親に相談すると、話が大きくなる。	.069	.591	.169	-.028
相談しても、母親にはわかってもらえない。	-.339	.536	.059	.067
相談すると、母親にあれこれ聞かれる。	.131	.506	.047	.184
一人で悩みに立ち向かうことで、強くなれる。	.137	.049	.709	-.069
母親に相談するよりも、自分で何とかすることで、成長できる。	.172	.133	.699	-.085
悩んでも、母親に相談するより自分で解決したい。	-.281	.049	.588	-.063
悩みや困ったことがあっても、母親に頼らず何とかするべきだ。	-.264	.036	.564	-.106
一人で悩んでいても、いつまでも悩みをひきずることになる。	-.007	.057	-.090	.808
誰にも相談しないと、ずっと悩みから抜け出せないと思う。	-.018	.101	-.066	.794
相談しないで一人で悩んでいても、よけい悪くなると思う。	-.026	.070	-.112	.718
因子間相関	1	2	3	4
1	-	-.449	-.259	.451
2		-	.214	-.135
3			-	-.153
4				-

(2) 親子関係における精神的自立尺度

親子関係における精神的自立尺度について、父母それぞれで、先行研究と同様の因子構造になることを確認するため、逆転項目の処理を行ったあとで、父母別に探索的因子分析（主因子法、Promax回転）を実施した。その結果、父母ともに十分な因子負荷量を示さなかった1項目（『父親（母親）のことを一人の人間として客観的に見ている』）を除外した。ほかは、父母ともに先行研究と同様の因子構造を示す結果となり、第1因子は「親との信頼関係」（6項目）、第2因子は「親からの心理

的分離」(4項目)となった。次に、尺度全体および下位尺度ごとに Cronbach の α 係数を算出した結果、父子関係で $\alpha=.662\sim.825$ 、母子関係で $\alpha=.732\sim.835$ を得ることができ、ある程度の内的一貫性が示された。父親と母親それぞれの最終的な因子分析結果を Table5 と Table6 に示した。

3. 各尺度の性差および父母における差の検討

まず、「親への相談行動の利益・コスト」,「親への相談行動意図」,「親との現在の関係」について、それぞれの下位尺度得点の平均値と標準偏差を父母別、男女別に算出した (Table7)。

Table 5
「父子関係における精神的自立尺度」の因子分析結果

	I	II
I 父親との信頼関係 ($\alpha=.825$)		
父親は私の考えを尊重してくれていると感じる。	.762	.092
父親は私のことを信頼してくれていると思う。	.728	.098
父親の生き方を支持している。	.693	-.035
私が親になったら、父親がしてくれたのと同じように子どもにしたいと思う。	.678	-.081
父親はいざというときには何を置いても私を助けようとしてくれるだろう。	.596	.042
父親に理解されてないと感じることが多い。	-.587	.181
II 父親からの心理的分離 ($\alpha=.700$)		
私の人生は父親の人生とは別の独自のものである。	.047	.750
私と父親とは、互いに独立した関係だ。	-.023	.612
私には、父親とは異なる独立した考えがあると思う。	.026	.607
父親の考えや期待にとらわれず、自分の信じたとおりに行動する。	-.069	.478
因子間相関	I	II
	I	-.112
	II	—

Table 6
「母子関係における精神的自立尺度」の因子分析結果

	I	II
I 母親との信頼関係 ($\alpha=.835$)		
母親は私のことを信頼してくれていると思う。	.777	.038
母親は私の考え方を尊重してくれていると感じる。	.742	.132
母親はいざというときには何を置いても私を助けようとしてくれるだろう。	.678	-.045
母親の生き方を支持している。	.677	-.003
母親には理解されていないと感じることが多い。	-.651	.245
私が親になったら、母親がしてくれたのと同じように子どもにしたいと思う。	.595	.088
II 母親からの心理的分離 ($\alpha=.764$)		
私の人生は母親とは別の独自のものである。	.063	.762
私と母親とは、互いに独立した関係だ。	-.083	.690
私には、母親とは異なる独立した考えがあると思う。	.051	.680
母親の考えや期待にとらわれず、自分の信じたとおりに行動する。	-.021	.559
因子間相関	I	II
	I	-.052
	II	—

Table 7
各変数の父母別・男女別の平均値と標準偏差

	父親		母親	
	男性	女性	男性	女性
	<i>M (SD)</i>		<i>M (SD)</i>	
相談行動意図	2.53 (1.11)	2.54 (1.12)	2.91 (1.22)	3.49 (1.27)
ポジティブな結果	3.03 (.691)	3.17 (.777)	3.33 (.702)	3.61 (.762)
ネガティブな結果	2.66 (.773)	2.57 (.882)	2.81 (.765)	2.71 (.795)
自助努力による充実感	3.34 (.808)	3.28 (.690)	3.14 (.944)	3.06 (.908)
問題の未解決	3.01 (.969)	3.61 (.896)	3.06 (.937)	3.61 (.911)
親との信頼関係	3.72 (.616)	3.88 (.665)	3.86 (.683)	4.02 (.693)
親からの心理的分離	3.79 (.663)	3.79 (.716)	3.78 (.743)	3.73 (.799)

(1) 親への相談行動意図の性差および父母における差の検討

親への相談行動意図について、相談する側の性別（男性・女性）×親の性別（父親・母親）の2要因分散分析を実施した（Table8）。

その結果、相談する側の性別の主効果（ $F(1, 268) = 90.236, p < .001$, 男性 < 女性）、親の性別の主効果（ $F(1, 268) = 5.259, p < .001$, 父親 < 母親）が有意であった。交互作用（ $F(1, 268) = 16.132, p < .05$ ）が有意傾向であったため、単純主効果の検定を行った。まず、男女別の父母差の検討を行うために、対応のある t 検定を実施した。その結果、「母親に対する相談行動意図」（ $t(287) = 4.149, p < .001$ ）で、女性のほうが有意に高いことが示された。次に、父母別の男女差の検討を行うために、対応のない t 検定を実施した。その結果、男性（ $t(127) = 4.182, p < .001$ ）と女性（ $t(141) = 9.095, p < .001$ ）ともに、「母親に対する相談行動意図」のほうが有意に高いことが示された。

以上より、父親よりも母親に対する相談行動意図が高く、男女別にみると、女性のほうが男性よりも母親に対する相談行動意図が高いことが明らかになった。

(2) 親への相談行動の利益・コストの性差および父母における差の検討

相談行動の利益・コストの各下位尺度に対して、相談する側の性別（男性・女性）×親の性別（父親・母親）の2要因分散分析を実施した（Table9）。

その結果、「ポジティブな結果」においては、相談する側の性別の主効果（ $F(1, 268) = 7.689, p < .01$, 男性 < 女性）と親の性別の主効果（ $F(1, 268) = 59.023, p < .001$, 父親 < 母親）が有意であった。「ネガティブな結果」においては、親の性別の主効果（ $F(1, 268) = 6.245, p < .05$, 父親 < 母親）のみ有意傾向であった。「自助努力による充実感」においては、相談する側の性別、親の性別、交互作用のすべてにおいて有意でなかった。「問題の未解決」においては、相談する側の性別（ $F(1,$

268) =28.750, $p<.001$, 男性<女性) が有意であった。

以上より、父親よりも母親への相談行動について「ポジティブな結果」と「ネガティブな結果」を予測しやすいことが示された。また、男性よりも女性のほうが相談実行の利益である「ポジティブな結果」と、相談回避のコストである「問題の未解決」で高い値を示した。

(3) 親への相談行動意図に影響を及ぼす変数の検討

相談する側の性別、親子関係、相談行動の利益・コストの4つの下位尺度が、相談行動意図に影響を及ぼすかを検討するために、父母別に重回帰分析を行った。性別および親子関係の2因子は強制投入法、利益・コストの下位尺度はステップワイズ法を用いた。その結果を Table10 に示した。

父母ともに「ポジティブな結果」から相談行動意図への正の標準偏回帰係数が有意であった(父親： $\beta=.456$, $p<.001$, 母親： $\beta=.607$, $p<.001$)。また、父親において「自助努力による充実感」から相談行動意図への負の標準偏回帰係数が有意であった($\beta=-.241$, $p<.001$)。また、父母ともに、相談行動意図と性別との関連は見られなかった。

以上より、父母ともに相談行動の「ポジティブな結果」の予測は相談行動意図に正の影響を及ぼし、「自助努力による充実感」の予測は父親への相談行動意図に負の影響を及ぼすことが示された。そして、「親との信頼関係」と「親からの心理的分離」の標準偏回帰係数が低かったため、親子関係は相談行動意図に直接的ではなく、利益・コストを介して影響を及ぼすことが想定された。

Table 8
相談行動意図における2要因分散分析結果

	分散分析			t検定			
	主効果		交互作用	男女差		父母差	
	相談する側の性別	親の性別		父親	母親	男性	女性
	F値		t値				
相談行動意図	90.24*** (男性<女性)	5.259*** (父親<母親)	16.132*	.105	4.149*** (男性<女性)	4.182*** (父親<母親)	9.095***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table 9
相談行動の利益・コストの2要因分散分析結果

	主効果(F値)		交互作用
	相談する側の性別	親の性別	
ポジティブな結果	7.689** (男性<女性)	59.023*** (父親<母親)	2.315
ネガティブな結果	1.293	6.245* (父親<母親)	.022
自助努力による充実感	.608	1.328	.062
問題の未解決	28.750*** (男性<女性)	.691	.587

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table 10
 相談行動意図とその他の変数における重回帰分析

説明変数	父親			母親		
	B	SE B	β	B	SE B	β
性別	-.129	.107	-.058	.227	.118	.088
親との信頼関係	-.002	.018	-.007	-.016	.020	-.051
親からの心理的分離	-.018	.020	-.045	-.009	.020	-.021
ポジティブな結果	.046	.007	.456***	.070	.008	.607***
ネガティブな結果	-.016	.007	-.121*	-	-	-
自助努力による充実感	-.090	.019	-.241***	-.069	.019	-.182
問題の未解決	-	-	-	-	-	-
R^2	.41***			.47***		

基準変数:相談行動意図 * $p<.05$,** $p<.01$,*** $p<.001$

(4) 親への相談行動の利益・コストに影響を及ぼす変数の検討

親子関係が相談行動の利益・コストに影響を及ぼすかどうかを検討するために、利益・コストの4つの下位尺度それぞれにおいて、父母別に重回帰分析を実施した。親子関係の「親との信頼関係」と「親からの心理的分離」の2因子を説明変数とし、強制投入法を用いた。父親についての結果をTable11に、母親についての結果をTable12に示した。

父親については、「父親との信頼関係」から「ポジティブな結果」への正の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta=.678, p<.001$)。また、「父親との信頼関係」から「ネガティブな結果」への負の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta=-.456, p<.001$)。「父親からの心理的分離」からは「自助努力による充実感」への正の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta=.248, p<.001$)。

母親については、「母親との信頼関係」から「ポジティブな結果」への正の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta=.700, p<.001$)。また、「母親との信頼関係」から「ネガティブな結果」($\beta=-.487, p<.001$)と「自助努力による充実感」($\beta=-.227, p<.001$)への負の標準偏回帰係数が有意であった。「母親からの心理的分離」からは「ネガティブな結果」($\beta=.227, p<.001$)と「自助努力による充実感」($\beta=.305, p<.001$)への正の標準偏回帰係数が有意であった。

以上より、父母ともに「親との信頼関係」が「ポジティブな結果」の予期に正の影響を、「ネガティブな結果」の予期に負の影響を及ぼすことが示された。そして、父母ともに「ネガティブな結果」への影響よりも「ポジティブな結果」への影響が強いことが示された。また、父母ともに「親からの心理的分離」が「自助努力による充実感」の予期に正の影響を及ぼすことが示された。母親においてのみ、「母親との信頼関係」が「自助努力による充実感」の予期に負の影響を、「母親からの心理的分離」が「ネガティブな結果」の予期に正の影響を及ぼすことが示された。

Table 11
親子関係と利益・コストにおける重回帰分析（父親）

	説明変数						R ²
	父親との信頼関係			父親からの心理的分離			
	B	SE B	β	B	SE B	β	
基準変数							
ポジティブな結果	1.751	.114	.678***	-.306	.179	-.076	.478***
ネガティブな結果	-.881	.105	-.456***	.001	.165	.000	.208***
自助努力による充実感	-.125	.040	-.182**	.266	.062	.248***	.105**
問題の未解決	.104*	.041	.153	.017	.064	.016	.023***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 12
親子関係と利益・コストにおける重回帰分析（母親）

	説明変数						R ²
	母親との信頼関係			母親からの心理的分離			
	B	SE B	β	B	SE B	β	
基準変数							
ポジティブな結果	1.909	.118	.700***	-.474	.158	-.130**	.496***
ネガティブな結果	-.926	.099	-.487***	.576	.132	.227***	.275***
自助努力による充実感	-.187	.047	-.227***	.336	.063	.305***	.135***
問題の未解決	.125	.043	.175**	-.075	.057	-.078	.035**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考察

1. 親への相談行動意図および利益・コストの実態

男女ともに、父親よりも母親に対して相談行動の「ポジティブな結果」を予期しやすく、相談行動意図が高いことが明らかになった。このことについては、父親と母親における性役割の違いが関係することが考えられる。親の性役割について、Grossman (1987) は、父親は自立性・分離的役割、母親は愛情・関係的役割であると述べており、父親と母親の役割が異なることが示されている。実際、男性は仕事中心の役割を、女性は子育て中心の役割を担うことが多く、父親が家に居る時間が母親よりも短い家庭が多い。そのため、母親と子どもが接する時間は父親よりも多くなり、子どもは母親に相談するような機会を持ちやすくなることが推察される。そのような親子の関係性が、父親と母親に対する相談行動の違いに影響を及ぼしていることが考えられる。

また、男女別にみると、女性のほうが母親に相談しやすいことが示された。母娘関係は情緒的結びつきが強いこと（水本・山根, 2011）が指摘されている。また、「子が困った時に親が支援する親子関係」は大学生の母娘関係にも顕著に見られる（落合・佐藤, 1996）。このような母娘関係が、女性のほうが母親に対する相談行動意図が高いという結果に関係していると考えられる。

さらに、女性のほうが相談実行の利益である「ポジティブな結果」と、相談回避のコストである「問題の未解決」を予期しやすいことが示された。永井・新井（2009）によると、相談実行の利益

である「ポジティブな結果」と相談回避のコストである「問題の未解決」は、いずれも理論上は援助要請を促進するものであるが、親への相談行動について女性のほうが相談行動を促進する利益・コストを予期しやすいことが示された。そして、この結果は、相対的に見て女子は男子より「相談すること」に親和的であるという森田(2003)の研究結果と一致すると考えられる。

2. 相談行動意図へ影響を与える要因

まず、父母ともに「親との信頼関係」が相談行動の「ポジティブな結果」の予期に正の影響を、「ネガティブな結果」の予期に負の影響を及ぼすことが示された。つまり、親と信頼関係を築けていることが、親への相談実行の利益である「ポジティブな結果」の予期につながり、逆に親と信頼関係が築けていないことは、親への相談実行のコストである「ネガティブな結果」の予期につながるといえる。そして、父母において、相談行動の「ポジティブな結果」の予期が相談行動意図に正の影響を及ぼすことが示された。すなわち、相談実行の利益である「ポジティブな結果」を予期することで、相談行動が促進されるといえる。一方、「ネガティブな結果」の予期は相談行動意図にはそれほど関係しないことが明らかになった。したがって、大学生において、親への相談実行の利益である「ポジティブな結果」を予期することが相談行動の促進に重要であり、その「ポジティブな結果」を予期するためには、親との信頼関係が築けていることが重要になると考えられる。

一方、親子関係のもう一つの側面である「親からの心理的分離」は、父母ともに「自助努力による充実感」の予期に正の影響を及ぼすことが示された。つまり、親から心理的に分離していれば、親への相談より自分で解決したほうが充実感を得ることができるといった、相談回避の利益を予期しやすいといえる。Tanner (2005)によれば、青年期から成人期への移行期は、親との関係においては自我が発達して自立的な関係をつくる上で重要である。また、依存欲求が高い場合、自己を客観的に捉えることが困難になり、アイデンティティを確立しにくくなる(竹澤・小玉, 2004)。そのため、親への相談行動を促進することが必ずしも重要であるとは言えず、親からの心理的分離によって自助努力による充実感を得ることも、大学生にとっては必要であると考えられる。この「自助努力による充実感」の予期については、父親への相談行動意図に負の影響を及ぼすことが示された。つまり、「父親からの心理的分離」によって「自助努力による充実感」が予期され、それが父親への相談行動を抑制させると考えられる。一方、「母親からの心理的分離」によって「自助努力による充実感」が予期されるものの、母親への相談行動意図にはそれほど影響しないことが明らかになった。小高(2008)は、青年は父親に比べ、母親からより多くポジティブな影響を受け、情愛的な絆も強いと述べている。そのため、母親よりも父親からの心理的分離のほうが顕著であり、それが父親への相談行動の抑制につながっていることが示唆される。

総合考察

1. 本研究の成果

本研究の目的は、青年期における両親それぞれに対する相談行動の実態や、親への相談に関するイメージを把握することであった。そして、大学生が友人関係などの悩みを抱えた際に適切な援助を提供する環境づくりと、大学生に対する親からの援助が有効に機能するための手がかりを示すこ

とを目的とした。そのために、研究1および研究2を行い、以下の成果を得ることができた。

研究1では、親への相談行動に特有の利益・コスト尺度が作成された。そして、研究2において、大学生は友人関係の悩みを母親に相談しやすく、特に女性のほうが母親に悩みを相談しやすいことが明らかになった。このことから、大学生にとって母親は、学生相談や友人以外の重要な援助資源となると考えられる。そして、「親との信頼関係」が相談行動の「ポジティブな結果」の予期につながり、相談行動が促進されることが示された。このことから、親へ相談することの利益である「ポジティブな結果」を強調することや、親自身が相談を受けた際に「ポジティブな結果」が得られるような働きかけをすることで、大学生が悩みを抱えた際に親を相談相手の一人とすることができると考えられる。一方、「親からの心理的分離」が相談実行のコストである「自助努力による充実感」の予期につながり、父親への相談行動を抑制することが明らかになった。永井・新井（2007）が述べるように、自分で悩みに取り組みたいという気持ちは、不適切なものではなく、必ずしも介入によって低下させるべきではない。大学生が父親へ相談しないという背景には、「自助努力による充実感」というプラスの側面も存在することが明らかになった。

以上より、親への相談行動には、従来の研究通り、相談行動の捉え方における男女の違いといった性別の要因だけでなく、「親への相談行動の利益・コスト」や「親との信頼関係」や「親からの心理的分離」などの親子関係が影響を与えるという見解を得ることができた。

2. 今後の課題

研究1の構成概念妥当性の検討に関しては、「ネガティブな結果」においてのみ、「サポート希求」と「被援助志向性の欲求」との相関がみられず、課題を残す結果となった。このことについて、基尺度が本研究の対象や相談相手とは異なる尺度であること、構成概念妥当性の検討が十分にされていない尺度を使用したことが関係していると考えられる。また、研究2において、「ネガティブな結果」の予期が必ずしも相談行動意図に影響を与えるわけではないことが明らかになった。そのため、「大学生における親への相談行動」については、構成概念妥当性を測定するためのより適切な尺度を選定し、再度相関関係を測定する必要がある。

研究2では、相談行動意図の規定因として親子関係と相談行動の利益・コストを取り上げて検討した。しかし、これらの変数のみが相談行動意図を規定するわけではない。今回は、友人関係の悩みに焦点を当てたが、これは親に相談することに比較的抵抗を感じる悩みの内容であると思われる。しかし、悩みの内容は様々であり、その内容によって親への相談行動意図やその利益・コストが異なることが考えられる。例えば、金銭的な問題があり、物理的なサポートが必要で親に相談せざるを得ない状況などが想定される。今後は、そのような様々な場面や悩みの内容において、相談行動意図の父母における差や利益・コストと相談行動意図との関連を検討する必要があるといえる。

さらに、中学生から大学生にかけては、親子の関係性が変化することが考えられる。そのため、中学生を対象に、「親への相談行動の利益・コスト尺度」を作成し、発達の観点から中学生と大学生の親への相談行動の違いを検討することが望まれる。

引用文献

- Addis, M. E. , & Mahalik, J. R. (2003). Men, masculinity, and the contexts of help-seeking. *American Psychologist*, **58**,5-14
- 芥川 亘・兒玉憲一 (2010). 大学生の友人に対する援助要請意識尺度の作成 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **8**, 33-42.
- DePaulo, B. M. (1983). Perspectives on help-seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fisher, (Eds.), *New Directions in helping. Volume 2 Help-seeking*. New York : Academic Press. pp. 3-12.
- 福岡欣治・橋本 宰 (1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, **68**, 403-409.
- 後藤安代・廣岡秀一 (2005). 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査的研究 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, **25**, 77-84.
- Grossman, F. K. (1987). Separate and together : Men's autonomy and affiliation in the transition to parenthood. In P. W. Berman et al. (Eds.) *Men's transitions to parenthood*. Lawrence Erlbaum Associates. pp. 89-112.
- 早川千恵子・佐藤成子・林ちさ子 (1994). 調査報告—「不安・悩み」に関する調査 東京女子大学学生相談室報告書, **1**, 3-42.
- 池田和夫 (2000). 日本人大学生の独立意識と親子間の親密さに関する研究 高知大学学術研究報告人文科学, **49**, 105-113.
- 加茂田智子・秋光恵子 (2012). 中学生の教師に対する相談行動における利益とコスト : 生徒の期待と教師の予測との比較 学校教育学研究, **24**, 23-30.
- 小高 恵 (2008). 青年の親への態度についての発達的变化 : 心理的離乳過程のモデルの提案 太成学院大学紀要, **10**, 31-48.
- 三浦正江・坂野雄二 (1996). 中学生における心理的ストレスの継時的変化 教育心理学研究, **44**, 368-378.
- 水口一郎・石谷真一・安住伸子 (2011). 大学における不登校・ひきこもりに対する支援の実態と今後の課題—学生相談機関対象の実態調査から— 学生相談研究, **32**, 23-35.
- 水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係:—「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の 4 類型モデル」の検討— 教育心理学研究, **59**, 462-473.
- 水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性,被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530-539.
- 森田美弥子 (2003). 青年期における「相談する」行動の意味 : 大学生を対象として 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **50**, 133-140.
- 永井 智・新井邦二郎 (2007). 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, **55**, 197-207.

- 永井 智・新井邦二郎 (2009). 中学生における友人に対する援助要請の統計的特徴—相談行動, 悩みの経験, 利益・コストにおける基礎的データの検討— 筑波大学発達臨床心理学研究, **20**, 11-20.
- 永井 智 (2010). 大学生における援助要請意図：主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因 教育心理学研究, **58**, 46-56.
- 中岡千幸・兒玉憲一・高田 純・黄 正国 (2011). 大学生の心理カウンセラーへの援助要請意図モデルの検討：援助要請不安, 援助要請期待及び援助要請意図の関連 広島大学心理学研究, **11**, 215-224.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11-22.
- 岡田 勤 (1999). 現代青年に特有な友人関係のとり方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 29-39.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 斉藤憲司・中釜裕子・香川 克・堀田香織 (1996). 学生相談の活動領域とその焦点—アメリカの大学におけるサポート・システムとの対比から— 学生相談研究, **17**, 46-60.
- 高井範子 (2008). 青年期における人間関係の悩みに関する検討 太成学院大学紀要, **10**, 85-95.
- 高木 修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, **29**, 1-21.
- 高野 明・宇留田麗 (2002). 援助要請行動からみたサービスとしての学生相談 教育心理学研究, **50**, 113-125.
- 竹澤みどり・小玉正弘 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, **52**, 310-319.
- 田村修一・石隈利紀 (2001). 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究 教育心理学研究, **49**, 438-448.
- Tanner, J. L. (2005). Recentring during emerging adulthood : A critical turning point in life span human development. In J. J. Arnett & J. L. Tanner (Eds.), *Emerging adults in America : Coming of age in the 21st century* (pp. 21-55). Washington, DC : American Psychological Association.
- 内田千代子 (2009). 大学における休・退学, 留学生に関する調査 (第 29 報). 平成 20 年度学生支援合同フォーラム 第 30 回全国大学メンタルヘルス研究会報告書, **30**, 70-85.
- 山田和夫 (1992). 「ふれ合い」を恐れる心理—青少年の“攻撃性”の裏側にひそむもの— 亜紀書房
- 吉武清實・大島啓利・池田忠義・高野 明・山中淑江・杉江 征・岩田淳子・福盛英明・岡 昌之 (2010). 2009 年度学生相談研究に関する調査報告 学生相談研究, **30**, 226-271.